

H. Toyokuni: Elementa Linguae Latinae Botanicae (5)

18. 新種の記載文の書きかた

現存植物の新しい分類群を命名するときに、ラテン語の記載文を付ける事が義務付けられていることは既に何回か書いた。いつかは動物分類学と同様に、植物分類学でも新分類群の命名の際に現代語で記載すれば正式に認められる時代が訪れると思うが、まだ現在では、ラテン語の記載文がないと正式発表とは認められない。我々が現在行っている「長野県植物誌」の編纂事業との関連で、今回新しい分類群を設けなければならぬ場合もきっと出てくると思うし、既に新しい学名だけ出来ていて、正式には発表されていない分類群も多々あると思われるので、それらを正式に発表する必要がある。勿論、学名の命名は植物分類学を専攻した人に任せるべきだという考えもある。しかし、一つの属 (genus) なり、あるいは科 (familia) なりを長野県全体についてまとめた人が、自分自身納得のゆく新分類群を必要に応じて自らの手で命名・発表するのは良い事だと私は考える。但し、いざ新しい学名を命名する場合には、その植物が実際に新しいものであるかどうか、必要な手順を踏んで十分に検討することと、新たに分類群を設ける価値が果たして本当にあるかどうかにも十分に考えなくてはならない。

そこで、前回の特徴記述 (diagnosis) の書き方に引き続いて今回は、実際のラテン語の記載文 (description) の書き方をご紹介します。

(1) 主格と短文を主にした記載文

記載文の最も簡単な形は、植物体の各部分を主語として、短文に区切って記載する場合である。

ここに、ご紹介するのは、実在しない架空の植物の記載文である。

Planta perennis. Caulis 10—20cm altus. Radix longa atrobrunnescens. Folia radicalia magna longe petiolata; petiolus alatus pilosus 5—7cm longus; lamina elliptica 5—7cm longa 3—5cm lata, supra viridis glabra, subtus glaucina pubescens. Folia caulina sessilia subrotundata, utrinque toto glabra margine serrulata. Inflorescentia corymbosa; flos 5—7mm longus 4—6mm latus; calyx

infundibularis ca. 3mm longus apice 5—dentatus; corolla urceolata caerulea vel purpureocaerulea toto glabra apice 5—dentata; stamina 5, 1.5—2mm longa; pistillum unum ca. 2mm longum; ovarium uniloculare; stigma capitatum. Fructus capsularis globosus ca. 1cm longus et crassus.

〔多年生植物。茎は、高さ10—20cm。根は長く暗黒帯褐色。根生葉は大きく長柄があり、柄には翼があり長さ5—7cm；葉身は楕円形、長さ5—7cm、幅3—5cm、上面は緑で無毛、下面は淡青緑色で軟毛がある。茎葉は無柄でやや円形、両面共全く無毛で縁は鋸歯縁。花序は散房；花は長さ5—7mm、幅4—6mm；萼は漏斗形で長さ約3mm、先端に5歯ある。花冠は壺形で青色または紫青色、全く無毛で、先端に5歯ある；雄しべは5本、長さ1.5—2mm、雌しべは1本、長さ約2mm、子房は1室；柱頭は頭状。果実はさく果、球形で、長さ幅共に約1cm。〕

上のラテン語記載文では、句読点を最小限度におさえたが、普通に句読点を付けると次のようにも書ける。

Planta perennis. Caulis 10—20cm altus. Radix longa, atrobrunnescens. Folia radicalia magna, longe petiolata; petiolus alatus, pilosus, 5—7cm longus; lamina elliptica, 5—7cm longa, 3—5cm lata, supra viridis, glabra subtus glaucina, pubescens. Folia caulina sessilia, subrotundata, utrinque toto glabra, margine serrulata. Inflorescentia corymbosa; flos 5—7mm longus, 4—6mm latus; calyx infundibularis, ca. 3mm longus, apice 5—dentatus; corolla urceolata, caerulea vel purpureocaerulea, toto glabra, apice 5—dentata; stamina 5, 1.5—2mm longa; pistillum unum, ca. 2mm longum; ovarium uniloculare; stigma capitatum. Fructus capsularis, globosus, ca. 1cm. longus et crassus.

本来のラテン語では句読点はあまり使用しなかったようで、18—19世紀の植物学者の中には、好んで

句読点をあまり使用しなかった人もたくさん居た。

また、全体が主格でなくても、書き出しの部分だけ主格で書き、後は尊格を使用した短文を付けるやり方がある。この場合の尊格は「性質の尊格 (casus ablativus qualitatus)」と呼ぶ。

主格+尊格の構文を繰り返す事により、次のような形になる。

Planta perennis, caule 10—20cm alto, radice longa, atrobrunnescente. Folia radicalia magna, longe petiolata, petiolo alato, piloso, 5—7cm longo, lamina elliptica, 5—7cm longa, 3—5cm lata, supra viridi, glabra, subtus glaucina, pubescente, foliis caulinis sessilibus, subrotundatis, utrinque toto glabris, margine serrulatis. Inflorescentia corymbosa, flore 5—7mm longo, 4—6mm lato, calyce infundibulari, ca. 3mm longo, apice 5—dentato, corolla urceolata, caerulea vel purpureocaerulea, toto glabra, apice 5—dentata, staminibus 5, 1.5—2mm longis, pistillo uno, ca. 2mm longo, ovario uniloculari, stigmate capitato. Fructus capsularis, globosus, ca. 1cm longus et latus.

前回解説した特徴記述に加えてここにあげた3形式の記載文のいずれか一つを付ければ、植物新分類群のラテン語記載文としては十分である。更に、詳細な部分記載については現代語（なるべく英語が望ましい）で書けば良い。

(2) 尊格を主にした記載文

この形式の構文を良しとして、好んで用いる人が

多いが、結局(1)で述べた「性質の尊格」を使用して書き出す事になるので、主語は、これから記載・命名しようとしている新分類群そのものの新学名である。従って、主語の性は、属 (genus) の性になる。

もしも、属の性が男性または女性である場合には、記載文は次のように書ける。

新分類群の学名, sp. nov.

Perennis, caule 10—20cm alto, radice longa, atrobrunnescente, foliis radicalibus magnis, longe petiolatis, petiolo alato, piloso, 5—7cm longo, lamina elliptica, 5—7cm longa, 3—5cm lata, supra viridi, glabra, subtus glaucina, pubescente, foliis caulinis sessilibus, subrotundatis, utrinque toto glabris, margine serrulatis, inflorescentia corymbosa, flore 5—7mm longo, 4—6mm lato, calyce infundibulari, ca. 3mm longo, apice 5—dentato, corolla urceolata, caerulea vel purpureocaerulea, toto glabra, apice 5—dentata, staminibus 5, 1.5—2mm longis, pistillo uno, ca. 2mm longo, ovario uniloculari, stigmate capitato, fructu capsulari, globoso, ca. 1cm longo et crasso.

ラテン語も練習して書き慣れれば決して難しいものではないので、どんどん挑戦していただきたいと思う。終わりに、ここに連載させていただいた解説を基礎にした拙著「植物学ラテン語辞典」の中の例文について、ご意見をお寄せ下さった京都大学理学部植物学教室の永益英敏氏に御礼申し上げる。

(続く)

〔新刊紹介〕 正宗徹敬「日本の自生蘭 写真と図第三・四集」 変形判 (29×22cm), 51・69頁。自費出版, 昭和62年3月・12月, 7,000円・10,000円。

本誌18号と20号にご紹介した一・二集の続編で、三集には、オキナワチドリ、ハクサンチドリ、ウチョウラン、カモメラン、ナゴラン、ヒメホテイラン、ホテイラン、ヤクシマヒメアリドウシラン、クモキリソウ、ジガバチソウ、キエビネ、トキソウ、コラン、イチョウラン、ナリヤランの14種1変種、四集には、エビネ、タカネ、アマミエビネ、サルメンエビネ、ツチアケビ、カゲロウラン、アオキラン、レブンアツモリソウ、ミヤマウズラ、ユウコクラン、マツラン、カンランの12種が載っていて、終わりに一・四集の和名・学名索引がある。写真が一段と鮮

やかで、細部の状態がよくわかる。古典の引用も楽しく、記載文にもご自分の長年の観察・栽培結果なども盛り込まれている場合があって、日本のラン研究には不可欠な好著であろう。(H. T.)

〔植物ニュース〕 125. ツルガシワ *Cynanchum grandifolium* Hemsl. var. *nikoense* (Maxim.) Ohwi

1987年8月19日釜無川の本谷の右岸で採取。諏訪地域では初採。花期は過ぎていて果実となっていた。杉本目録では「温帯山地の林下に稀、霧積山、荒舟神津牧場方面の報告あるも県内か否か不詳」とある。「佐久の植物」では、馬坂、相木、荒船などの林下とある。植研のチェックリスト1984年版にはのっていない。(今井建樹)